

序

あなたはなぜこの本を手に取りましたか？ 栄養管理に興味があるから？ 自分が受けもった患者さんの栄養管理で困ったから？ それとも、本の題名に惹かれたから…？

近年、栄養療法が注目されるようになり、“NST（栄養サポートチーム）”は医療従事者にとっての常識となりました。ご存じの通り、栄養は患者さんにとってのエネルギー源。十分なエネルギーが摂取できなければ筋力も免疫力も低下しますが、栄養療法が成功すれば治癒力が増し、患者さんの表情や意識レベルが改善して、疾患に立ち向かう闘病心がわいてきます。治るため、生きるためには栄養療法が必要不可欠なのです。高カロリー輸液やPEGで命が救えるようになり、栄養に関するデバイスや栄養剤のバリエーションも増えて、たくさんの選択肢が存在するいま、栄養療法を活かすも殺すも、患者さんのQOLを上げるも下げるもあなたのさじ加減次第です。

しかしその一方で、6年間の医学部教育カリキュラムのなかで栄養に関して学ぶ機会が少ないことが全国的に問題となっています。栄養士はもちろん、看護師、薬剤師、言語聴覚士、他のどの職種の卒前教育と比較しても、医学部における栄養学の講義は少ないのです。あなたは、医学部の講義で栄養について学んだことを覚えていますか？ 疾患の治療マニュアルにも、処方レシピは書かれていても、食事・栄養のレシピについて書かれているものは少ないですね。遭遇する頻度の高い肺炎の診療ガイドラインにさえ、“誤嚥性肺炎では絶食にしましょう”とも“誤嚥性肺炎だからこそ嚥下・摂食状況に合わせた食事を選びましょう”とも書かれていません。薬剤と同じように、食事箋を処方するのも医師なのに、指導医の先生によって考え方も違うし、病棟によって管理方法も違ったりして、「先生、飲水いつからですか？」、「あの患者さん、1割しか食べられていませんが、点滴抜いてもいいですか？」、「下痢していますけど、経腸栄養どうしましょう？」と聞かれて困ったこと、ありませんか？ evidence-based medicine と言いながら、とりあえず入院したら絶食、って知らず知らずのうちに決めつけていませんか？ 栄養について後輩に聞かれたら、教えてあげられる自信がありますか？…医師には必要不可欠な知識だと思いませんか？

私が長崎大学病院で研修医の先生に栄養の講義をすると、「もっと早く知りたかった」、「こんな大切なことも知らなかったなんて」、「栄養ってわかると面白い」と答えてくれます。たしかに、学生時代に習わなければ栄養管理は難しいですね。輸液管理のように基礎から教えてくれる指導医の先生もなかなかいないです。意外なことに若手医師向けに書かれた栄養学のテキストも少ない。しかし、栄養療法というジョーカーを使いこなせるようになると、間違いなくあなたの診療能力、患者さんの治癒力は向上します。なぜなら、患者さんの全身の病態を把握できていないと栄養療法の戦術は立てられ

ないし、栄養療法がうまくいくと合併症を減らすことができるからです。この本を手にした今、あなたの手元に栄養療法というジョーカーが回ってきました。それを活かすか殺すかはあなた次第。このチャンスを逃さずに、一度読んでみてください。

企画にあたりまして、若手医師の皆さんにわかりやすく栄養療法を学んでもらうために、学会や講演でプレゼンテーションの巧みな先生方や、私と栄養療法に関するベクトル・バイブスが同じ先生方をお願いして資料を作成していただきました。内容に関しては、研修医からよく質問される項目や、栄養療法の醍醐味を味わえるエピソード、症例問題まで、他の職種向けに書かれたテキストにあるような疾患ではなく、若手医師の先生方が困るような病態・シーンを取り上げました。その魅力たっぷりのアツイ講義は、きっと皆さんの脳とおなかを存分に満たし、栄養療法のインパクトを感じさせてくれることと思います。また、普段は普通体で文章を書いていただくところを、執筆される先生方、羊土社編集部さんをお願いして、学会のプレゼンテーション、若手医師向けのセミナーと同じように丁寧体で執筆していただくことにしました。

皆さんが栄養療法を学び、実践して、患者さんの治癒力と笑顔を引き出せるようになることを心から願っています。

そして、無理なお願いを受けていただいたカリスマプレゼンターの先生方と、栄養学講義を全国へ展開するチャンスをいただいた羊土社の皆さまに心から感謝いたします。

2015年12月

長崎大学病院 救命救急センター（前所属）
りんくう総合医療センター・大阪府泉州救命救急センター（現所属）
泉野浩生